

800年の時空を超え 岩手平泉と大館をむすぶ

藤原泰衡公の思いが眠る 二井田 錦神社

生きとし生けるものすべてが、苦から解放され、福楽を得る「抜苦与楽 普皆平等」の社会の実現を願った、奥州藤原氏の思いがここに。



2022.May.18 / 錦神社にリーフレット献納



2022.May.26 中尊寺で破石副住職の講話を拝聴



2023.Sep.3 錦神社例祭の神事に参列

錦神社の中尊寺ハス

「中尊寺ハス」は、泰衡公の首桶に入れられていたハスの種子を、800年の時を経て中尊寺で開花させたものです。

館（たて）町内会の住民が株分けしていただき、神社敷地内の池で大切に育てています。例年、7月半ば～9月始めにかけて見事な花を咲かせます。



文治5年(1189)9月3日夜

泰衡凶害!
その真相はひまだ謎

※泰衡の最期については、河田次郎が自害に追い込んだ後、その首をはねたという説が一般的ですが、自分が原因で河田家中の混乱を招いてしまったことを感じた泰衡が、自ら命を絶ったなど、諸説あります。温厚であったと伝えられる泰衡の人柄を考えると、後者の説にも納得させられます。

この通り、泰衡の首を持参いたしました。將軍様の恩賞にあずかりたく存じます

頼朝との関係を築き、恩賞や頼朝に召し抱えられることを期待した河田は、陣岡(紫波町)まで進んでいた頼朝の下に参じました。

これで肥内の無事は守られ、河田家の安泰も図られよう...

しかし、河田の行った行動は裏目に出ってしまったのです。

泰衡の命運はすでにこの頼朝が握っている。河田の得意ばりは、よけいなことだ。それよりも、藤原氏の家臣として、主君に尽くす立場でありながら、逆に恩義を仇で返した河田の裏切り行為は、断じて許しがたい。河田の首をはねてしまえ。

河田の行動は、頼朝の父義朝が長田忠致(ただむね)に裏切られて殺されたできごとを思い出させるものでした。

今更命乞いをしてくるとは... しかも泰衡の方から居場所を知らせてくるとは好都合じゃ

手紙の内容は、自分の考えが父秀衡と違うことや、許しが得られれば、頼朝への服従を誓うので、返答を肥内郡まで届けてほしいというものでした。

泰衡の使いの者が、手紙を持参しました

奥州征伐によって壊滅状態となった奥州藤原一族。藤原家の再興を図るため、泰衡は肥内郡贄柵(ひないぐんにえのさく=大館市二井田)の河田次郎(かわだのじろう)のもとに、一時身を寄せることにしました。

9月3日 泰衡討たれる 贄柵
8月22日 頼朝平泉入り 平泉 衣川 陣ヶ岡
8月10日 阿津賀志山の戦い 多賀城

頼朝のことだ。ここには命の保証もないであろう... 頼朝の誤解が解けるまで、平泉を離れることにしよう

藤原泰衡

はじまり

奥州征伐に向かうぞ、平泉の藤原一族を倒すのじゃ!

奥州征伐の理由
・幕府の謀反人である義経を頼朝に断りもなく討伐したのは、將軍の存在の軽視と幕府への干渉である。
・朝廷の宣旨(命令)に逆らって、義経をかくまった藤原氏は朝敵にあたる。

源頼朝

その頃、贄柵城の河田家中は混乱し、内紛が起きていました...

主君である泰衡様をお護りすることが即従としての立場...とはいえず、鎌倉方を相手に戦うことになれば、肥内の領民を巻き込むことになるが、それは領主として避けたいことだ

河田次郎盛継(もりつぐ) 奥州藤原氏譜代の郎従で肥内郡を所領としていました。

もともと恩義の薄い泰衡様に、中立のわれわれが尽くす必要はあるのか? ここは領民の無事と河田家の安泰を選ぶのが最善ではあるまいか...

とよ 800年の時空をこえ 平泉と大館を結ぶ 錦神社の由来

錦神社は奥州藤原氏の四代当主泰衡公をお祀りしています。大きな神社ではありませんが、歴史ある神社です。



錦神社のハス
泰衡公の首桶から見つけた蓮の種より開花した「中尊寺ハス」を、平成29年4月に株分けしていただき、大切に育てています。例年7月中頃から8月中頃にかけて楽しむことができます。

二井田では、首をはねられた泰衡のなきがらを、里人が錦の直垂(ひたたれ)に大切に包んで埋葬し、「にしき様」と呼んでお祀りしました。それが錦神社となり、命日である9月3日には例祭が行われ、今に至っています。

無念の思いやさぞかし

にしきのような高貴な雰囲気をもったお方でした...



平泉中学校訪問 2022.May.26

本リーフレットの制作にあたり、二井田館町内会前会長故松田正樹氏を始め、大館郷土博物館、大館市教育委員会歴史文化課、大館市建設部等のみなさまのお力添えをいただきましたことに、深く感謝申し上げます。

参考および引用文献・資料：大館市HP、吾妻鏡、郷土・平泉学(平泉中学校編)

ちゅうぞんじ もうつうじ 中尊寺・毛越寺・平泉中学校訪問

令和4年度の3年生の修学旅行の際、ふるさとと奥州藤原氏のつながりをテーマに、中尊寺と毛越寺を訪ねました。この時、ふるさと学習における響学関係のきっかけづくりになればという願いのもと、短時間ではありましたが、平泉中学校に立ち寄らせていただき、本校チャレンジ活動の歴史・文化班の代表者4名と生徒会長が、自作資料とPRリーフレットをお届けして、奥州藤原氏終焉の地の住民としての思いを伝えることができました。

「平泉学」として、地域の歴史や文化を体系的に学習する仕組みを整えている平泉中学校様から、平泉学のテキストや、SDGsにつながる手作りの「世界遺産キャンドル」を資料としていただき、学びを深めるとともに、その後の活動内容の参考にさせていただくことができました。

にしき 藤原泰衡と二井田錦神社



大館市二井田（にいだ）地区、館（たて）町内にある**錦神社**には**藤原泰衡**公が奉られています。

源頼朝の奥州征伐（おうしゅうせいばつ）から逃れる途中で、無念の最期（さいご）を迎えてしまった泰衡公の亡骸（なきがら）が二井田の里人の手によって錦の直垂（ひたたれ）に包まれ、丁重に葬られたことから、この墓所を**錦様**（にしきさま）」と呼ぶようになりました。

後にここに錦神社が建立されましたが、泰衡公の命日の**9月3日**には毎年例祭が行われ、二度と戦乱の悲劇を生まないようにと、初代藤原清衡公以来求め続けた、「**抜苦与楽 普皆平等**（＝命あるものすべてが苦しみから救われる）」の社会が実現することを願い、今に至っています。

※泰衡公の首級（しゅきゅう）は、中尊寺の金色堂（こんじきどう）の須弥壇（しゅみだん）に納められています。

→中尊寺を訪ね、副住職の破石師から由縁を聞く南中生。
（令和4年5月）



→錦神社例祭の神事に参列し、玉串を奉奠（ほうてん）する、歴史・文化遺産継承班班長。
（令和4年9月）



←令和5年の錦神社例祭の神事に参列し、玉串を奉奠する生徒会副会長。
（令和5年9月）



にしき 藤原泰衡と源頼朝



藤原泰衡 (1155~1189)

藤原泰衡は平安末期の武将で、**藤原秀衡**（ひでひら）の次男です。秀衡には4人の子がいましたが、後継ぎとなったのは泰衡でした。

さて、秀衡の保護のもと青年期までを平泉で過ごした**源義経**は、泰衡にとっては兄弟同然の間柄でした。その義経が、**源頼朝**から追われる身となると、再び秀衡が保護しますが、このことで奥州藤原氏と頼朝との間に緊張が生じてしまったのです。

秀衡が亡くなると、泰衡は義経を自害に追い込み、その首を頼朝のもとに届けて、関係を改善しようとした。ところが、謀反人（むほんにん）の義経を、頼朝に断りもなく討伐（とうばつ）したことが、頼朝に対する侮辱（ぶじょく）であると決めつけられ、逆に関係を悪化させてしまいました。

さらに、朝廷からも義経の追討（ついとう）命令が出されたことで、義経を保護した奥州藤原氏は朝敵（天皇に対する反逆）の濡れ衣を着せられてしまったのです。

これらを口実に、源頼朝の**奥州征伐**（せいばつ）が開始され、極楽浄土を表したといわれる藤原の都は、滅亡への道をたどることになってしまいました。

戦乱のさ中、兄**国衡**（くにひら）や主だった武将を失い、頼朝軍に抗しきれないと判断した泰衡は、平泉にあるすべての財産を捨て去り、夷狄嶋（いてきのしま 蝦夷地とも＝北海道）を目指して脱出したといわれ、**肥内郡**（ひないぐん＝大館地方）の在地領主である郎従（ろうじゅう）の**河田次郎**（かわだのじろう）を頼って、**贄柵**（にえのさく＝大館市二井田）城に立ち寄ったところで、無念の最期を迎えることになってしまったのです。



令和4年の修学旅行の際に、平泉中学校を訪問。錦神社および南中学区のPRを目的に、プレゼンテーションを行う南中3年生。
（令和4年5月）

かわだのじろうもりつく 藤原泰衡と河田次郎盛継

河田次郎 (不詳 ~1189)

河田家は、肥内郡の郡司系の在地領主とされています。次郎は実直で人望のある武将であったことから、泰衡公が頼ったと考えられます。

奥州征伐にかかわり、中立の態度をとっていた河田家は、泰衡公の受け入れをめぐって混乱したのです。それは、恩義が薄かった主君に郎従として忠義を尽くのすか、それとも領主として戦（いくさ）を回避し領民の生活を守るのか…次郎もまた苦渋の決断を迫られました。二井田が戦場になることを避け、領民の生活を守ることを選んだといわれます。

結果として、頼朝のもとに泰衡公の首を届けることになった河田でしたが、彼もまた主君裏切りの汚名のもとに、**陣ヶ岡**で斬首されてしまいます。

錦神社の横を流れる犀（さい）川を渡ったところに**贄柵城跡**があり、敷地内には小さな社（やしろ）があります。この社は、領主として自らの命と引き換えに領民を守った、河田を祀るために建てられたものです。

にしきと 錦神社と西木戸神社

泰衡公の最期をめぐる、もうひとつの悲話です。

頼朝軍から逃れる途中で、行動を共にすることで家族に危害が及ぶことを心配した泰衡公は、現在の盛岡市に夫人と子を残し、わずかな従者と共に単身で奥羽の山を越えたのでした。

ところが、泰衡公の身を案じた夫人も、遅れること数日で二井田の地にやって来ました。

再会できると喜んだのも束の間、そこで聞かされたのは、予期しなかった泰衡公の訃報でした。悲しみと絶望のあまり、夫人は自ら命を絶ってしまいました。その場所には、夫人の供養のための五輪の塔が立てられ、これが後に「**西木戸神社**」になったということです。

※西木戸神社（比内町八木橋字五輪台）は個人宅の敷地内にあるので、参拝の際は承諾が必要です。

※五輪台の周辺地域が藤原国衡の直轄地であり、国衡には「西木戸太郎」の通称があったことから、地元の人々は「西木戸様」と呼び、地名としても西木戸と呼んでいました。